

四十六年前の

ラブ・レター

和田 奈良子

桜の花盛りの日に、東京からS子がやってきた。四泊五日の短い滞在だったが、心ゆくまで喋り合つて帰つていった。

彼女は、夕食時にはご飯の代わりにビールを飲む。飲めない私は彼女にビールを勧めながら、それでも彼女と同じくらいに酔つた気分になつて、いつしか昔なつかしい人たちのことで話題が盛り上がった。

ふいに、思いがけない話を聞かされた。それはもう二十年以上も前の出来事なのだ。第一回目の戦友会が東京で開かれたとき、その席上で当時まだ消息不明だった私の噂が出たそう。K氏が突然、私からラブ・レターをもらつたという、A氏は「僕は一度ももらつたことはない」といつたそう。

「私ね。ああこの二人、全然逆のことをいつてゐるんだな、と思つたわ」

息の止まりそうなS子の話だった。それはもう四十六年前に、当時私が軍属として貨物廠に勤めていた頃のことなの

に、まるで昨日のことのように体が火照つた。K氏の心なさをなじるよりも、A氏がそのことばをどう受け取つたか、そのことの方がもつと恥ずかしかった。

「まあ、あなた驚いた。赤くなつちやつて、純情なこと」

S子は声をたてて笑つた。

四十六年前の昭和十九年、北満の冬は早い九月だというのに、牡丹江では初雪が降つた。その日私は、本隊から列車で十五時間も離れた寒村の出張所に転出していった。見送りにきてくれたA氏が手を差し伸べた。

「また会おう」

初めての握手だった。A氏の真つ白い手袋の上に落ちた雪は薄く、すぐに消えた。

一ヶ月ほどして、A氏から電話があつた。簡単な、どうしている、元気が、仕事には慣れたか、とただそれだけだった。それからの私は、何度もA氏に手紙を書いた。仄かな思いを込めて……。しかし、その手紙はA氏には届かなかつた。検閲されるのが怖くて、私は一通も投函しなかつたからだ。

何年か経つた。いつか上手な出会いをしようと思つたようになっていた。

ずい分遅れて、私も戦友会に出席するようになったが、その頃にはもうA氏の姿は見られなくなつていた。

K氏も二年前の冬、風邪から余病を併発して、既に他界していた。過去に幾度か会合に出席するたびに、「伝説的な自分の噂」に、不快な思いをすることが度々あつた。どう考えても、あの話はK氏の冗談から出たことだろうとしか思えな

かったのだ。

五年前、熊本での会合のとき、私は日帰りで出席した。女たちばかり五、六人で歳の話をしていた。私は三月生まれとなつてはいるが、実際は節分までの生まれなのが、出生の届け出がうまくいかなかったからと聞かされているので、干支は前の年をとることにしている。

「私イノシシだから、もう六十二になつたわ」

そのときだ。

「嘘いえ、奈良子は大正十三年三月生まれだから、まだ六十だぞ」

声にはならず、あつけにとられて顔を上げた。

「俺は、お前に気があつたんだ。本当だぞ。本当にあつただぞ」

K氏は私の両手を握り、何度もいった。細くひんやりした手だつた。

「まあ、ごちそうさま」

周りが一斉に笑つた。何人かからは、両脇をつつかれた。

もう四十六年も昔のことだ。部隊の庁舎の廊下は仄暗い。

突然、K氏から手を握られたときは、驚きよりも辱められたという思いに憤然とした。夏のむっとした汗の臭いと、ねつとりと脂ぎつた不快な感触は、いつまでも手の中に残つていた……。

いまは町内会長や老人会長をやつてんだ。と一本一本指を折つて語るK氏は、一回りも小さく、利かん気だつた昔の面

影はなかつた。

S子が帰つたあと、彼女との思い出話はいつまでも余韻を残した。ラブ・レター事件も、懐かしくさえ思えてきた。

夏、またくるという彼女のために、夏茶碗を作ろうと思ひたつた。そして、しばらくご無沙汰していた陶芸の先生のところに通ひ始めた。

もう半生紀にもなろうとしているのに、いまでも年一回全国どこかで戦友会が開かれている。出会えば男女の区別なく互いに手をとり、懐かしみ、涙して語り笑い合う。同じことを繰り返すのだ。別れも尾を引いて、幾組かのグループで二次会、三次会にまで及び、半月もかかつてやっと我が家に帰り着く人たちもいる。それが生き甲斐とさえなつてきているのだ。

今年の集まりは十月、鬼怒川温泉である。いま、懐かしい顔を思い浮かべながら、「私の作る茶碗をあげよう」と、土をひねりながら、少し心を弾ませている。

(了)